
インドネシアにおける「イスラームの位置付け」 をめぐる政治的闘争

見市 建
Miichi Ken

はじめに

イスラーム暦でラマダーン月（断食月）だった2018年6月のことである。インドネシア最大のイスラーム組織「ナフダトゥル・ウラマー」（NU）の幹部であるヤフヤ・ホルル・スタカフが、イスラエルを訪問した^①。パレスチナ情勢が悪化する状況下で、イスラエルの民間財団に招聘され、英語で講演を行ない、ネタニエフ首相にも面会した。しかし、イスラエルのガザ攻撃を容認する行為だとの批判が巻き起こった。これに対してヤフヤは、平和的にパレスチナ問題解決を求めるための民間外交だと弁明した。

ヤフヤはジョコ・ウイドド（以下、通称のジョコウイ）大統領直轄の諮問委員会メンバーに就任して間もなかったこともあり、訪問への賛否は、大統領への支持・不支持とも直結した。ソーシャルメディア上でも、野党政治家だけではなく、普段からジョコウイ政権に批判的な論者が揃ってヤフヤを非難した。それは2019年4月に控えた大統領選に向けた権力闘争でもあった。大統領や政党間だけでなく、社会を巻き込んだ対立は、ジョコウイが当選した2014年大統領選以来、段階を経て先鋭化してきた。

では、どのような勢力がジョコウイ政権を支持し、あるいは誰が反対しているのか。彼らを分かつのは何か。インドネシアにおける「イスラームの位置付け」がこれらを理解する鍵になる。まずはジョコウイ政権における政教関係を確認したうえで、2019年大統領選挙へ向けた支持・不支持派の攻防を読み解いていきたい。

1 ジョコウイ政権と「イスラーム・ヌサンタラ」

2014年10年に発足したジョコウイ政権は、内向きの政権だと評されてきた。就任1年目に目立ったのは、外国の違法漁船の爆破処分と外国人麻薬犯の死刑執行であった。いずれも、もっぱら国内向けに「強い指導者」像をアピールする機会となった。ユドヨノ前政権時と異なり、対外的なメッセージの発信は少なかった。しかし、2016年1月に首都ジャカルタの目抜き通りにおいて、衆目のなかで起こった「イスラーム国」（IS）支持者によるテロ事件以降、ジョコウイは「穏健なイスラーム」のイメージを内外で強調するようになった。テロ事件直後には、ちょうどレトノ・マルスディ外相のイランとサウジアラビア訪問があり、両国に和平を呼びかけた。その3ヵ月後の2016年4月にはジョコウイが、イギリス議会において、イスラームと民主主義の調和、過激主義への対策について演説した。最近では、2018年1月

にジョコウィがアフガニスタンを訪問し、同地で民族衣装を纏って祈禱の先導も行なった。

インドネシアの「穏健なイスラーム」を宣伝する機会に、頻繁に用いられるのが「イスラーム・ヌサンタラ」という概念である。ヌサンタラとはインドネシアを中心とした東南アジア島嶼部を指す。インドネシアの地域的な文化と文脈、独自のイスラームの発展を重視し、寛容性や多宗教間の共存を賛美する立場である。対抗概念となるのは（単純化された）「中東」あるいは「アラブ」のイスラームである。そこで想定されるのは、初期イスラーム（サラフ）への回帰を謳い、厳格な法解釈を行なう「サラフィー主義」、エジプトのムスリム同胞団を起源とし社会や国家のイスラーム化を志向する「イスラーム主義」である。

イスラーム・ヌサンタラは、1980年代から国立イスラーム大学ジャカルタ校の学長だったアジュマルディ・アズラらによって提唱されてきた。アズラらはまた「インドネシア法学派」の樹立を目指してきた⁽²⁾。インドネシア固有の社会状況や伝統に見合った、イスラーム法の解釈を体系化しようという試みである。NU会長から大統領になったアブドゥルラフマン・ワヒド（在任：1999—2001年）も同様に「イスラームの土着化」を主張してきた⁽³⁾。ワヒドに連なる知識人のなかには、女性のベール着用は「アラブの地方文化」にすぎず、イスラームの本質的な規定ではない、と主張する者もいる。こうした系譜を踏まえ、近年、冒頭で言及したヤフヤ・ホルル・スタカフなどNUの若手知識人が積極的にイスラーム・ヌサンタラを取り上げるようになり、2015年のNU全国大会では公式テーマになった⁽⁴⁾。

イスラーム・ヌサンタラは、言い換えれば、他宗教を含めた国民の調和（ナショナルリズム）を優先する立場である。インドネシアのなかでも、より「純粋な」イスラームを志向し、土着的な文化とイスラームの混淆に抵抗を示す勢力は、この概念を嫌う。彼らにとって「イスラームは一つ」であり、これを細分化するような形容詞は付けるべきではない、と主張する。後者はイスラームの一体性を優先する立場である。ここでは前者を「多元主義」、後者を「イスラーム主義」と呼ぶことにする。

ジョコウィは、2015年のNU全国大会を前に「われわれのイスラームはイスラーム・ヌサンタラだ。礼儀正しいイスラームで、品位があるイスラームである。これこそがイスラーム・ヌサンタラ、寛容性に満ちたイスラームだ」と称賛している⁽⁵⁾。裏を返せば、紛争が頻発する「中東のイスラーム」、そのインドネシアにおける輸入版たるサラフィー主義やイスラーム主義は、礼儀や品位、寛容性に欠ける、ということになる。その後、上記のような外交の機会や国際フォーラムなどでたびたび言及するようになった。

もっとも、イスラーム・ヌサンタラは、対外的にはもっぱら欧米や日本の聴衆向けである。冒頭で述べたヤフヤ・ホルル・スタカフは民間でそういう役割を担ってきた。他方、中東諸国にとってはインドネシア独自の思想や概念はまったく眼中にない。まして中東のイスラームを否定的に捉える概念であればなおさらである。あえてこの概念を使う理由は、インドネシア国内の聴衆を意識してのことである。理解の鍵となるのは政権とNUとの蜜月である。イスラーム・ヌサンタラの国内政治における文脈を理解するために、まずジョコウィ政権を誕生せしめた2014年の大統領選まで遡ってみよう。

2 2014年大統領選挙——対立軸の形成

ジョコウィは世俗的な人物とみなされてきた。政治家デビューとなった2005年のスラカルタ（ジャワ島中央部の古都）市長選でも、2012年のジャカルタ州知事選でも、ペアを組んで立候補したのはキリスト教徒であった。ジョコウィはいずれも任期途中で、より上位の選挙に立候補したので、残されたキリスト教徒の副市長・副知事が繰り上がって首長となった。ジョコウィを担いできた「闘争民主党」にも非ムスリムが多く、世俗ナショナリズムを代表する政党とみられている。2014年大統領選で（そして来る2019年大統領選でも）対立候補となったプラボウォ・スビアントも、元来宗教的な人物ではないが、イスラーム主義勢力と連携した。彼らは元軍人のプラボウォを「イスラーム共同体の最高司令官」と持ち上げた⁶⁾。さらに国会に議席をもつイスラーム系4政党のうち、3政党がプラボウォ陣営に加わった⁷⁾。プラボウォは長年権威主義体制を敷いたスハルト大統領の元娘婿であり、陸軍特殊部隊の隊長として数々の人権侵害の過去もあった。このため、キリスト教徒などの非ムスリム、非ムスリムとの共存を重視する多元主義者、人権活動家などリベラル勢力の大半はジョコウィを応援した。大統領選を通じて、こうした対立軸が明確になっていった。

イスラーム色が薄いジョコウィに対しては、「シンガポール生まれの華人」、「父親が共産黨員」、「母親がキリスト教徒」、「シーア派」、「シオニストの手先」といったレッテルを貼り付けるネガティブ・キャンペーンが展開された。こうしたレッテルには、ジョコウィは、スンナ派ムスリムが多数派を占めるインドネシアの正統な指導者に値しないという含意がある。同様の攻撃は、2012年にジョコウィが華人でキリスト教徒のバスキ・チャハヤ・プルナマ（通称アホック）とともにジャカルタ州知事選に立候補したときに始まり、かたちを変えながら繰り返されている。

2014年10月にジョコウィ政権が成立すると、当選に貢献した多元主義者やリベラルな活動家が大統領府に多く登用された。大統領広報官のジョハン・ブディや大統領官房長のテテン・マスドゥキはいずれも政府の汚職撲滅委員会や反汚職非政府組織（NGO）に属していたというキャリアをもっていた。彼らの人事は清廉なイメージを強調したい大統領の意向と合致していた。他方、イスラーム主義政党である「福祉正義党」は、プラボウォの「グリンドラ党」とともに野党として政権批判に終始した。より急進的なイスラーム主義勢力もジョコウィへの敵対姿勢を明確にした。ユドヨノ前大統領の時代は、しばしば大統領へのロビー活動によってイスラーム主義勢力が影響力を発揮するケースがあったが、ジョコウィはそうした機会を与えなかった。次節で述べるように、イスラーム主義勢力が路上に出て大々的な示威行為を行なったのには、このような背景があった⁸⁾。

2014年大統領選において、イスラーム系政党で唯一ジョコウィを支持したのはNUを基盤とする「民族覚醒党」であった。NU前会長のハシム・ムザディ（2017年3月死去）はジョコウィの選挙運動に貢献、新政権発足後に大統領諮問委員会のメンバーになった⁹⁾。しかし、NUは上意下達の組織ではなく、民族覚醒党との関係も一貫したものではない。3000万とも言われるNU票を左右する地方の宗教指導者のなかには、プラボウォに付く者も少なくなか

った。ジョコウィもプラボウォも、本人は確固たる宗教的信念をもっているわけではない。しかし、それぞれが連合を組んだ多元主義者、イスラーム主義者とともに、その「中間」にあるムスリム大衆の支持を得るべく、攻防を繰り返した。そして、この対立は2019年大統領選をにらみながら、先鋭化していった。

3 「宗教冒瀆」抗議運動とジョコウィ政権の対応——対立の深まり

NUがジョコウィ政権とさらなる接近を遂げる契機となったのは、2016年末の「宗教冒瀆」事件である。華人でキリスト教徒のジャカルタ州知事アホックによる、2016年9月の遊説先での不用意な発言が「宗教冒瀆」とみなされ、大規模な抗議デモが発生した。すでに述べたように、アホックは2012年に、ジョコウィと組んでジャカルタ州副知事に当選、ジョコウィの大統領就任によって、知事に昇格していた。このため、アホックへの抗議運動の「真の標的」はジョコウィというのがもっぱらの解釈であった。つまり、2019年の大統領再選を阻止することがより大きな目的である、とされた。

このアホックの発言が「宗教冒瀆」にあたりと裁定したのが、NU総裁でありインドネシア・ウラマー評議会（MUI）議長を兼職するマアルフ・アミンであった⁽¹⁰⁾。マアルフ・アミンはユドヨノ大統領期には、大統領諮問委員会のメンバーとして、イスラーム主義者によるロビー活動の窓口になってきた。ただしマアルフ・アミンは確固たるイスラーム主義者ではなく、機会主義的である⁽¹¹⁾。抗議運動を主催したイスラーム主義者は、マアルフ・アミンによるMUI議長としての法的裁定（ファトワー）というお墨付きを得て、「ファトワーを防衛する」との名目を掲げた。2016年11月4日、12月2日と大規模なデモが行われた。

抗議運動を率いたのは、リゼク・シハブやザイトウン・ラスミンといった急進的なイスラーム主義者であった。リゼク・シハブが率いる「イスラーム防衛戦線」（FPI）は、これまでバーやディスコ、宗教的少数派や性的少数派（LGBT）への時に暴力を伴う攻撃で知られてきた。またFPIの設立には治安当局が関与しており、みかじめ料を徴収する怪しい「イスラームやくざ」のイメージがあった。しかし抗議運動の過程で、リゼク・シハブは自らを「偉大な宗教指導者」として演出することに成功した。ザイトウン・ラスミンはマカッサル（南スラウェシ州）を拠点とするサラフィー主義組織「ワフダ・イスラミヤ」の代表である⁽¹²⁾。福祉正義党やカリフ制国家の樹立を目指す国際組織である「解放党」も動員に貢献した。さらに、ジョコウィとアホックに対抗する政治エリートが多額の資金を提供し、テレビでよく知られた説教師が登壇した。急進派の支持者は数が知れている。運動の主催者は、「政治的目的」を否定して「平和的な一大宗教イベント」であることを強調し、一般のムスリムの動員を図った。

その結果、70万人とも言われる、1998年の民主化以降最大規模のデモが開催された。12月2日を示す「212」が抗議運動そのものを指すようになった。動員による圧力を受けた当局は、アホックを容疑者として認定し、最終的には宗教冒瀆罪で禁固2年の有罪判決が下った。アホックは2017年4月の州知事選でも敗退した。「212同窓会」が複数結成され、2017年12月2日には1周年記念のデモを開催、運動を美化する映画も制作された。もっとも、「宗教イベン

ト」と位置付けられた比較的穏当な抗議運動の背後では、「中国から違法な労働者が100万人流入」といったフェイクニュースがソーシャルメディアを席卷した。野党勢力たるイスラーム主義者たちは、華人であるアホックへの偏見や差別意識を、中国の経済的「侵略」というフェイクニュースとのリンクを通して、顕在化させたのである。

ジョコウィは11月4日の最初の大規模デモ以降、政党指導者やNUをはじめとした主要イスラーム組織に接近して事態を取捨しようとした。主要イスラーム組織はこれに応じて12月2日のデモへの参加を自粛するように呼びかけた。この過程で、大統領はマアルフ・アミンに近づき、重用するようになった。また貧困層向けの少額融資（マイクロ・ファイナンス）などの事業を、NUの宗教学校を通して行なうなど、利益を供与した。マアルフ・アミンはたびたびジョコウィと行動を共にし、政権寄りの発言をするようになった。取り込みにも成功したわけである。最終的には、マアルフ・アミンは、2019年大統領選挙におけるジョコウィの副大統領候補にまで上り詰めた⁽¹³⁾。

ジョコウィ政権はまた警察当局を通じて抗議デモの主催者たちに圧力をかけた。アメとムチで分断工作を行なったのである。なかでも抗議デモの成功によって一躍名を挙げたりゼク・シハブには複数の容疑がかけられた。リゼクは2017年5月に海外逃亡し、以後1年以上サウジアラビアのメッカに滞在している。2018年7月までに、警察は複数の捜査を取り下げたが、帰国の目処は立っていない。

2017年5月には、政府が法的手続きによって解放党を解散させる方針を示した。解放党のイデオロギーは急進的であるが、大学キャンパスを中心に拡大し、これまでインドネシア国内における暴力的な事件は報告されていない。解散命令は、大統領令による大衆団体法の改正によって実施された（のちに国会が承認）。解放党が国家5原則（パンチャシラ）に反するとの理由付けであった。新大衆団体法は運用次第では、思想信条の自由を侵す可能性もあり、人権団体からも反対があった。解放党の解散に積極的かつ継続的な支持を表明したのが、前出のアジュマルディ・アズラなどの多元主義知識人の一部とNU、特にその青年組織「アンソール」であった。NUなど既存のイスラーム組織は、解放党のような新興組織の伸張に悩まされており、政権と利益が合致していた。なおアンソールの現代表は、ヤフヤ・ホリル・スタカフの弟ヤクト・ホリル・コマスである。現在のNUの主要ポストは多元主義者が握っており、さらにマアルフ・アミンがジョコウィに付いたことで、政権とNU指導部の蜜月関係はいつそう強固なものになった。

4 「メッカ枢軸」と「北京枢軸」、その限界

ジャカルタ州知事への抗議運動は、2019年大統領選に向けたイスラームをめぐる対立構造を決定的にした。最後に、再びジョコウィの敵側の動きからみてみよう。メッカに逃れたりゼク・シハブは、巡礼を名目にメッカを訪問した野党政治家としばしば会談し、ソーシャルメディアや212同窓会を通してメッセージを発している⁽¹⁴⁾。NUと並ぶ全国的イスラーム組織「ムハマディヤ」の元会長で212同窓会顧問に就任したアミン・ライスも戦線に加わった。2018年6月初旬には、プラボウォがアミン・ライスと共にリゼクを訪れている。リゼクらは、

同月の統一地方選でジョコウィ政権に対抗する候補を、また2019年大統領選でプラボウォへの支持を表明している⁽¹⁵⁾。リゼクはあたかもキングメーカーのように振る舞い、イスラーム主義勢力と野党との連合を「メッカ枢軸」と自称した。そして、敵対するジョコウィの与党連合を「北京枢軸」と呼んでいる。言うまでもなく、「メッカ枢軸」はイスラーム的権威を纏った肯定的なイメージを含意している。そして、ジョコウィには中国政府（あるいは共産党）と近いという否定的なイメージを植え付けようとした。ジャカルタの「宗教冒瀆」事件で成功したように、華人への偏見、中国および共産党の脅威とジョコウィとをリンクさせようとしたのである。アミン・ライスに至っては、「アッラーの政党」と「悪魔の政党」による対立とまで言い放った。

プラボウォが大統領選出馬をなかなか表明せず、副大統領候補も決まらないまま、8月10日の候補者登録締め切りが近づいた。212同窓会はプラボウォの副大統領候補選びにも介入した。「宗教指導者（ウラマー）の総意として」福祉正義党総裁のサリム・セガフ・ジュフリ（ユドヨノ政権で社会相、在サウジアラビア大使）と41歳の大学講師で説教師のアブドゥル・ソマドを推薦した。この2人を推薦した会合には、プラボウォほか野党の指導者も集まった。ソマドは、冗談を交えながらのテンポよいトークによって、近年比較的若い層の間で人気を高めてきた。彼の説教を収めたYouTubeのビデオクリップは軒並み数百万回のアクセスがある。その説教には、イスラーム主義的な価値観が織り交ぜられている。2017年12月には香港に出国拒否されたが、これにはジョコウィ政権の意図が働いたともっぱらの噂である。プラボウォの擁立は、彼が党首のグリンドラ党ほか、国会に議席をもつ3政党の合意によってなされる。したがって特定の政党に属さず、若年層に浸透しつつあるソマドは適当な副大統領候補として急浮上した。実際プラボウォ陣営は、ソマドにアプローチしたが、本人が固辞したため実現しなかった。アミン・ライスの娘で作家のハヌム・ライスはソーシャルメディアで「ソマド効果」を訴え、テレビの人気討論番組で涙ながらにソマドに立候補を呼びかけたが、やはり徒労に終わった。

二転三転の末、ジャカルタ州副知事のサンディアガ・ウノがプラボウォの副大統領候補に選ばれた。サンディアガは49歳の実業家であり、グリンドラ党にも入党している。ソマドと同様に若年層の支持が期待されるが、イスラーム色は極めて薄い。リゼク・シハブは、ソマドが駄目ならば、サリム・セガフ・ジュフリを擁立すべきだと主張したが、福祉正義党以外の連立パートナーには容認できなかったようである⁽¹⁶⁾。イスラーム主義者の影響、そして「メッカ枢軸」構築の限界であった。つまりは「イスラームとその敵」という対立構造を決定付けることができなかった。

ジョコウィも副大統領候補を立候補登録最終日まで公表しなかった。プラボウォ側の動きを見届けたうえで、既述のように政友アホックの追い落としに貢献した張本人であるマアルフ・アミンを副大統領候補に立てた⁽¹⁷⁾。皮肉にも、ジョコウィが宗教指導者を副大統領候補に立て、プラボウォはジョコウィ以上に宗教とは無縁の実業家を伴って大統領選に臨むことになった。プラボウォを支持するイスラーム主義勢力は、いずれにしろジョコウィに対して似たようなネガティブ・キャンペーンを行なうだろうが、宗教指導者であるマアルフ・アミ

ンへの攻撃は難しい。アホックが陥った「宗教冒瀆」の恐れがあるからである。「イスラーム外交」やNUへの接近によって、世俗的なイメージの解消に努めてきたジョコウィの戦略は、2019年の再選に向けてこれまでのところ成功していると言えるだろう。

ただし、NUのような既存のイスラーム組織やその指導者がどこまで社会を掌握できるのか、という問題は残る。ジャカルタ州知事アホックの「宗教冒瀆」への抗議運動の成功は、既存の組織や政党を超えた幅広い動員によるものだった。実現はしなかったもののアブドゥル・ソマドの大統領選出馬が突如現実味をもったのも、彼が流動化する社会の一面を体現しているからである。NUの若手知識人やイスラーム・ヌサンタラをめぐる多元主義者の主張も、政府の支援を受けることで、かえって社会の現実から乖離してしまうのではなかろうか。それでも、少なくとも大統領選までは、ジョコウィを支える以外に多元主義者の選択肢はないだろう。

- (1) ヤフヤ・ホリル・スタカフは中ジャワ州レンバンの宗教名士の家に生まれ、高校レベルのイスラーム学校から、国立の名門ガジャマダ大学に進学している。グス・ムスの通称で知られる叔父のムストファ・ビスリは著名なイスラーム知識人（ウラマー）ないし詩人である。当時弱冠20歳代で、1999年から2000年にかけて、アブドゥルラフマン・ワヒド大統領の官房長官になったが、このことを覚えている人はインドネシアでも少ないだろう。近年ではむしろ海外での活躍が目立っている。2014年にアメリカのノースカロライナ州にバイト・ラフマ（神の恩寵の家）という団体を設立し、インドネシアの「寛容なイスラーム」について発信するようになった。彼の名前を検索すれば、『ニューヨーク・タイムズ』ほか、英語メディアの窓口になっていることがわかるだろう。
- (2) 法学派（マズハブ）とは、預言者ムハンマド（632年没）の死後、神からの新たな啓示が下されなくなったため、アッラーの意図を知るための啓示解釈の知的営為の集積を指す。10世紀前半までにスンナ派4大法学派（ハナフィー、マーリク、シャーフィイー、ハンバル）が成立した。現代インドネシアにおいて、イスラーム法の成文化の過程で提唱されたのが「インドネシア法学派」である。1991年大統領令として発布された「イスラーム法集成」は、最高裁判所と宗教省が中心になり、異なる立場の法学者への聞き取りや、エジプト、トルコ、モロッコとの比較、そして集中的な討議を踏まえて決定された。R. Michael Feener, “Indonesian Movements for the Creation of a ‘National Madhhab’,” *Islamic Law and Society*, Vol. 9, No. 1, 2002, pp. 83–115. 小林寧子「インドネシア」、柳橋博之編『現代ムスリム家族法』、日本加除出版、2005年、87–240ページ。
- (3) 2015年のNU全国大会に合わせて出版された書籍『イスラーム・ヌサンタラ』の第1章には、ワヒドの「イスラームの土着化」が収録されている。序論でも述べたように、イスラエルとの関係を拒絶するのではなく、対話を通して変化を求めるべきだというヤフヤの立場もまた、ワヒドを継承している。
- (4) NUにおけるイスラーム・ヌサンタラの公式採用には、組織内の政治も関係している。前会長のハシム・ムザディ（在任：1999—2010年）の時期には、NUはコーラン（預言者章107節）に基づき、普遍的な神の慈悲や慈愛、寛容さを強調する「世界への慈悲（rahmatan lil’alamin）」を標語としていた。NUとつながりが深い民族覚醒党も2014年総選挙ではこれを標語としていた。後述のように、ハシム・ムザディおよび民族覚醒党は2014年の大統領選でジョコウィを支持した。選挙期間中にジョコウィ陣営から発行されたタブロイド誌の名前も「世界への慈悲の灯火」であった（見市建『新興大国インドネシアの宗教市場と政治』、NTT出版、2014年、179–180、193ページ）。イスラーム・ヌサンタラの採用は現会長のサイド・アキル・シラジが就任してからのことである。したがってハシム・ムザディは、自らの退任後に採用されたイスラーム・ヌサンタラに少なからぬ抵抗を

示していた。

- (5) “Polemik di balik istilah ‘Islam Nusantara’,” BBC Indonesia, 15 June 2015.
- (6) 彼らは独立戦争や1965年の共産党との闘争（実際は一方的な虐殺）における、国軍とイスラーム勢力の協力関係を理想的と捉えている。
- (7) ここでのイスラーム系政党とは、党のイデオロギーにイスラームを掲げるか、イスラーム宗教組織を主たる支持基盤とする政党を示す。このうちイスラーム主義と言えるのは福祉正義党のみである。イスラーム系以外の政党は世俗ナショナリスト政党と呼ぶこともできるが、これらもイスラームの宗教指導者や組織にアプローチしており、「世俗」を看板にはしていない。1999年以降4度の総選挙で、イスラーム系政党の合計得票率は3割程度である。世俗ナショナリスト政党がつねに上位2党までを占め、2014年総選挙では上位4党まで世俗ナショナリスト政党であった。見市建、前掲書、35-37ページ。
- (8) ユドヨノ期の宗教的な保守化とジョコウィ政権との対比については以下を参照。見市建「イスラームと政治——ユドヨノ期の『保守化』とジョコウィ政権の課題」、川村晃一編『新興民主主義大国インドネシア——ユドヨノ政権の10年とジョコウィ大統領の誕生』、アジア経済研究所、2015年、245-267ページ。
- (9) NUは宗教的権威である総裁（Rois Aam）と実質的な組織運営を行なう会長の二重権力構造になっている。これまで前者には長老が就任し、組織の重石となってきた。ハシム・ムザディはNUの会長であった2004年に、副大統領候補として出馬している。この時の大統領候補が、闘争民主党党首で2014年にジョコウィを担いだメガワティ・スカルノプトリであった。これに対して、サイド・アキル・シラジは2010年にNU会長に就任すると、当時のユドヨノ政権に近づいた。サイド・アキル・シラジは思想的には多元主義者であるが、ハシム・ムザディとのライバル関係から、2014年大統領選では「個人として」プラボウォを支持した。ジョコウィは、ハシム・ムザディを大統領諮問委員に登用する一方で、サイド・アキル・シラジ現会長の大統領選でのプラボウォ支持を問題視しなかった。ユドヨノが、大統領選でメガワティと組んだハシム・ムザディを遠ざけたのとは対照的である。なお、ヤフヤ・ホルル・スタカフの大統領諮問委員への就任は、ハシム・ムザディの死去による空席を埋めるものであった。
- (10) MUIは1975年に政府の諮問機関として設立された。スハルト大統領の権威主義体制では、もっぱら政府の政策をファトワー（法学裁定、イスラームの法規定に関する権威ある見解）によって裏書きする「御用学者」の機関であった。それが民主化後には国家からの独立性を高め、しばしば保守的あるいは急進的な主張を代表することで影響力を行使するようになった。
- (11) マアルフ・アミン（1943年生まれ）は学識の高いウラマー（イスラーム法学者）として認められているが、政治家としてのキャリアも長い。長らくメッカに滞在し、20世紀初頭インドネシアの宗教指導者を育てた高名なウラマー、ナワウィ・バンタニは祖父である。マアルフ・アミンは20歳代からNUの地方組織幹部に名を連ねた。1973年総選挙以降、イスラーム系野党の「開発統一党」の国会議員を務め、民主化後の1999年総選挙ではアブドゥルラフマン・ワヒドが設立した民族覚醒党から当選した。マアルフ・アミンがイスラーム主義者であれば、より考えの近い開発統一党に残ったであろう。その後、NUの非主流派が設立した「ウラマー国民覚醒党」（PKNU）にも参加している。民主化後の党歴からも、マアルフ・アミンの腰の軽さがうかがえる。
- (12) ワフダ・イスラミヤは全国に120の支部、170の学校をもつ。近年、政府のプログラムを利用して辺境地域にも浸透を図っている。Chris Chaplin, “Islam and Citizenship,” *Inside Indonesia*, Edition 129, Jul-Sep 2017 <<http://www.insideindonesia.org/islam-and-citizenship-2>>.
- (13) このほか、アホックへの抗議運動に賛同していた元ムハマディヤ会長のデイン・シャムステインが2017年10月に「宗教間対話と協力のための大統領特別代表」に、これまで政権に批判的でアホックへの抗議運動にも参加した説教師のアリ・ムフタル・ガバリンを2018年5月に大統領官房スタッ

フに加えた。7月には212同窓会が（副）大統領候補の1人に挙げていた宗教指導者で西ヌサトゥンガラ州前知事トゥアン・グル・バジャンがジョコウィの再選支持を表明、ジョコウィ側の副大統領候補の1人として検討されるようになった。

- (14) リゼク・シハブやFPIのソーシャルメディア（ツイッターとフェイスブック）は一時ブロックされたが、他のアカウントを使って復活している。
- (15) 2018年6月の統一地方選では主要州の一部で与野党対決が実現した。最大の有権者人口を抱える西ジャワ州の知事選では、事前の調査で支持率1桁台だった野党候補が、212同窓会の支持も得て、現職にあと一步のところまで追いつけた。北スマトラ州知事選では、アホックの副知事だったジャロットが立候補したが、野党候補に惨敗した。中ジャワ州では逆に与党側の現職が圧勝した。他の多くの地方では、与野党対決にはならず、より地域的な論理で連立が組まれた。
- (16) もう1人の有力候補はユドヨノ前大統領の息子で元軍人のアグス・ハリムルティ・ユドヨノであった。ユドヨノの「民主主義者党」は8月になってから、プラボウォとの連立を表明していた。
- (17) ジョコウィの副大統領候補として最後まで名前が残っていたのは、元憲法裁判所長官のマフッド・MDである。マフッドはワヒド元大統領に近く、東ジャワ州出身であり、政党にも属していないのでNUや他の政党にも受け入れやすい人物であった。マフッドは2014年大統領選の候補者にも名前が挙がっていたが、候補の1人としていた民族覚醒党がジョコウィ支持に回ったため、最終的にプラボウォ陣営に加わった。